

昭和 45 年度
(1970)

厳冬期涸沢岳西尾根から西穂高岳・前穂高岳・明神岳

昭和 45 (1970) 年 12 月 24 日～1 月 4 日

この合宿は、アンナプルナ遠征隊の準備に忙しい時期に行われた合宿であった。アンナプルナで遭難した佐藤正敏君がリーダーとして行った最後の合宿となった。初めての穂高の飛騨側からの登攀を試みた合宿で、焼岳から始まって穂高周辺をくまなく歩いている。

冬の穂高は、もう私達の身近に感じられなくなって、幾年経てしまった。冬の一級ルートであること、一年生、二年生養成には不相当であること、既に部にとっては未知の山域ではないことなどが主な原因だったと思う。

今年度の部の方針は、部の最低レベル維持の 2 回の合宿と分散を全ての原点とし、部の志向する未知への積極的な行動、高さへの、困難への行動を導こうとしている。この意味で 3 回の合宿は非常に重大な意味を持つものであり、それ故に早急にその結果、成果を問うものではなく、その後に行われる個人山行の成果を待って反省すべきではないだろうか。

冬山合宿の反省を一通り知った今、自分のリーダーとしての不適さ、未熟さ、狭さに痛烈な自己嫌悪を感じさせられると同時に、2 回の夏までの合宿とその後の山行の成果が、現実として返ってきたと思うのは、私個人の解釈にしか過ぎないのだろうか。部の方針が生かされた山行を重ねたればこそ、そして、その指導がある程度意味を持っていたからこそ、穂高では物足りない、印象が薄い等と言われるのではないだろうか。

アンバランスな部員構成、合宿に課せられた多くの矛盾ともとれるような課題、それらを考えた場合、私たちのリーダー会にとって精一杯のものであった。

私は海外遠征を部活動の延長と考えている。遠征が全てに優先するものではない。信大として保つべきレベルはあると思うし、それが遠征ということでないがしろにされ、不満を残してはならない。今回は下級生もよく分かってくれたし、理想的とは言えなくとも解決出来たと思う。

何はともあれ、冬山は無事計画を遂行できた。このことは、素直に受け取り、それなりの評価は与えて良いと思う。同時に冬山は予測を越える現象の可能性も常に存在するというを常に意識に置かなくてはならない。春山個人山行には各人の一年の締め括りとして、実り多いものであることを期待したい。ヒマラヤでは同じ時期にキャラバンが開始される。ヒマラヤの山、日本の山とは遙かな距離はあっても、一本の意識の糸で何かが繋がっているようなものでありたい。合宿、ご苦勞様。

そして、今回ほど、OB 各位のご理解を身近に感じたことはありませんでした。現役一同、感謝の念に耐えません。明日からの私たちの幼い歩みに、より一層のご支援をお願いいたします。

CL 佐藤 正敏

経過 (これ以降は、SAC のホームページの報告書を参照されたい)

1、計画の発端

2、検討および準備

3、総括と今後の展望

(前略)

私たちは、部の現状とか、いろいろ一見矛盾する条件を出来るだけ充たそうと思い、妥協に走りすぎたといえる。理想的な状態でないときほど、どこかに重点を置く必要があるといえる。私たちはスーパーマンでもなし、ごく平凡な能力しか持たない者の集まりであるから、一度に全てのことをやろうとしても、今回のようなアブハチとらずの結果が出てしまう。そして、この結果、過程に対し、下級生から厳しい批判が出てきたのは、ある意味で、大きな意義を持つものである。結果を反省することは、非常に大切なことであるが、単なる批判であってはならない。そして、とにかく、4年の周期で同じことを繰り返しやすい大学山岳部においては、過去の部を振り返り、明日からの部活動に対し、ある程度の展望を持ってからのも

のでなくてはならない。(中略)

私たちは、活動をスムーズにするため、それぞれ各係を作っている。係の最低の義務を果たすことが、部活動に参加する第一歩ではないか。私たちは、登山のプロでは決してない。また、部はプロを養成するところでもない。登ればよいというのではないのである。何のために部を作り、一緒に行動し、活動しているのかを各人、それぞれに常に意識し、自分のものとしていかねばならない。

とりとめもなく、まとまりもないことを書いたが、多くの反省と問題を残した冬山合宿を基点とし、これからの山行を私たち一人一人、造っていかねばならない。合宿は部活動の終点ではなく、出発点である。春山からの若い力を期待したい。最後に新人指導の面で欠けた点を、春山である程度カバーできるよう、リーダーの心つもりを要望とし、締め括りといたします。 CL 佐藤 正敏

参加メンバー

CL 佐藤正敏 SL 市野和雄 扇能 清 井関芳郎 山下泰弘 (OB)

装備 三坂健次 白井 武 三井和夫 渡部光則

食糧 小根田一郎 大安徹雄 伊藤直樹 小泉正人 金野美登志 村上純一

気象 鳥越洋一 高橋雄治

医療 三坂健次 中田 茂

梱包 鳥越洋一 川口 隆 間瀬健治

渉外 大安徹雄 板東 昭

会計 小根田一郎

記録 大安徹雄

本隊

CL 佐藤正敏 大安徹雄 鳥越洋一 白井 武 三井和夫 渡部光則 伊藤直樹 小泉正人

金野美登志 村上純一 高橋雄治 中田 茂 川口 隆 間瀬健治 板東 昭

潤沢岳西尾根隊 L 扇能 清 市野和雄 三坂健次

サポート隊 L 井関芳郎 山下泰弘 小根田一郎

本隊行動記録

12月24日 松本～中の湯～釜トンネル～大正池
～中尾峠登り口TS
山吹トンにデポ。釜トンには氷結なし。

12月25日 TS～山吹トンネル～西穂高岳登り
口～割谷山取り付き～TS
デポを回収。割谷山取り付きにデポ。

12月26日 TS～割谷山尾根～割谷山北のTS

積雪 1m、割谷山頂上付近は気温 -15 度。やっと冬山らしくなった。

12月27日 TS～デポ回収～TS

冬山とは思えないような一日だった。

12月28日 TS～中尾峠～焼岳～中尾峠～TS

晴天、無風、焼岳からのパノラマを楽しむ

12月29日 TS～西穂高山荘～デポ～TS

サポート隊と出会う。

12月30日 TS～西穂高山荘～TS～デポ品回収～TS

快晴、無風、絶好の天気。涸沢隊到着。

12月31日 沈殿

佐藤、市野、鳥越は西穂高岳 AC へ雪。視界悪し。

1月1日 TS～独標～西穂高岳～独標～TS

高橋、顔、両手に凍傷。独標は混雑でうんざりする。

1月2日 沈殿

1月3日 TS～上高地

15時、市野、小根田帰天。すぐ撤収開始。アイゼン着用の下りは辛かった。さすが逃げの信太、実に早かった。

1月4日 上高地～沢渡～松本

21名全員。沢渡まで歩き。マイクロで松本へ。

涸沢岳西尾根隊行動記録

12月24日 松本～富山

12月25日 富山～新穂高～白出沢出合～西尾根取り付き TS

笹の上に積もった雪が滑り、昇り難い。ブッシュ、急斜面に泣かされる。

12月26日 TS～支尾根稜線～デポ地～TS

今日一日ガス。時々晴れ間見える。

12月27日 TS～蒲田富士～白出コル～TS～白出コル TS

日光が届き春のよう。白出コルは大変寒い。

12月28日 TS～奥穂高岳～ロバの耳～ジャンダルム～コブ尾根の頭 TS

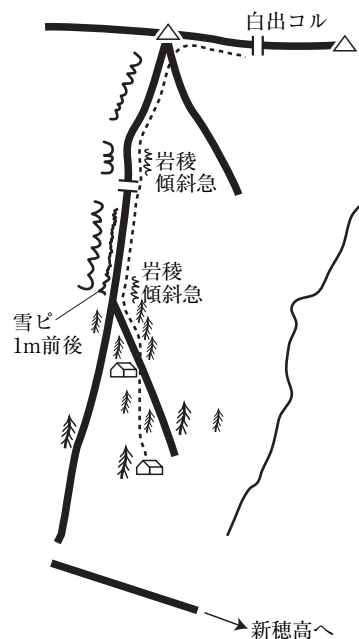
ロバの耳トラバース、トレースなく時間かかる。

12月29日 TS～天狗のコル～天狗岳 TS

午後より天気回復。岳沢側はガス。飛騨側は快晴

12月30日 TS～西穂高岳～TS、

西穂高岳からはトレース、フィックスあり、大変楽。本隊と合流。



涸沢岳西尾根 by K. OGINO

サポート隊行動記録

12月27日 松本～中の湯～釜トンネル～大正池～西穂高岳登り口 TS

なべを忘れる失態。快調に TS へ。

12月28日 TS～西穂高山荘～TS～デポ地～TS

昨晩は大分冷え込んだ。本日は天気快晴、風弱し。

12月29日 沈殿

12月30日 TS～独標～西穂高岳～AC

西穂高岳から少し奥穂高岳よりのピークに AC を建設。

12月31日 AC～間ノ岳～天狗のコル～AC

風雪強く、視界不良。フィックス工作を行う。

1月1日 TS～間ノ岳～天狗のコル～ジャンダルム～AC

縦走隊のサポート。行けるところまでと、ジャンダルムまで。

1月2日 沈殿

1月3日

山下、大安は奥穂高岳アタック。市野、小根田、鳥越はジャンダルム間のフィックス回収。後、本隊と合流。上高地まで下山。本隊と合流。

明神岳縦走隊

1月1日 TS～間ノ岳～天狗の科尔～ジャンダルム～奥穂高岳～白出科尔

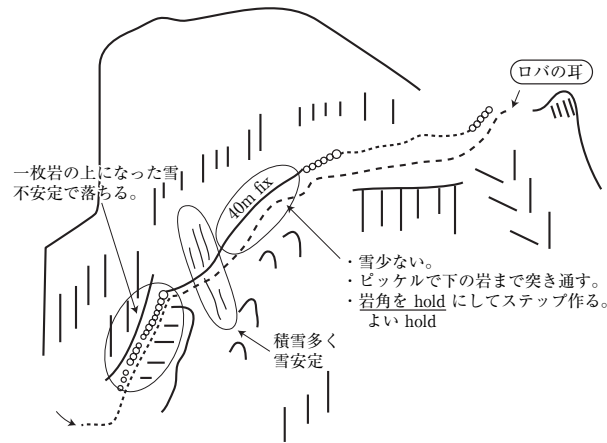
縦走隊、佐藤、井関。市野、鳥越、小根田のサポートを受けて出発。

ロバの耳の下降がいやらしい。

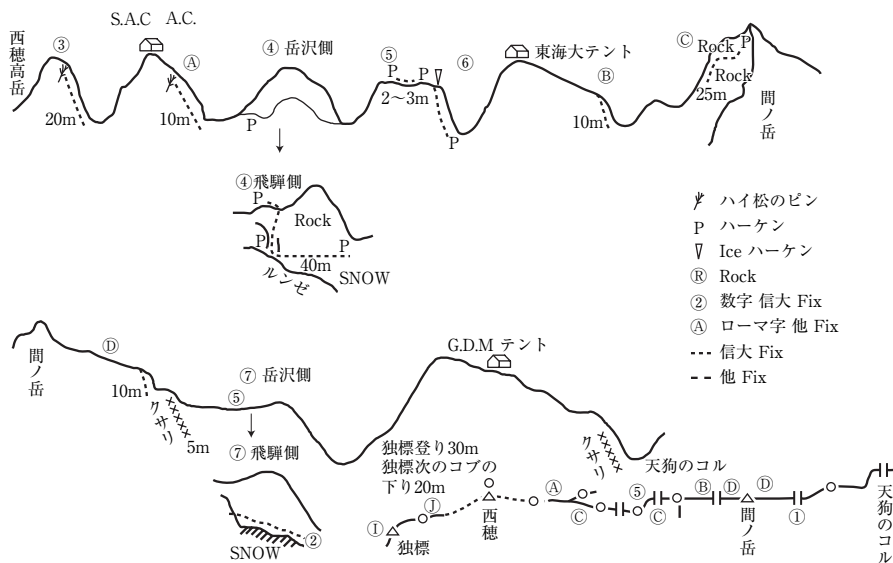
1月2日 沈殿

1月3日 白出科尔～奥穂高岳～前穂高岳～明神岳～三峰～岳沢～上高地

吊り尾根は、殆ど稜線通しに行く。岩の上に薄く雪がついているところが不安定だ。明神二峰は、岳沢側のトラバースルートを取る。三峰からは、一気に岳沢へ下る。



ロバの耳、トラバース by K. OGINO



独標-天狗科尔 Fixed Rope Route Sketch by I. ONEDA